

## 移植体験記

「今、出来る最善の事

〜姉からの贈り物〜」

荒木 美弥子(個人会員)

誰の人生にも「分岐点」があるとすれば、私にとって始まりは中学一年の尿検査でした。尿に蛋白が出ている事がわかり、再検査と言われたのです。それがその後、30も続く腎臓病との闘いの始まりであり、私はまだ12歳でした。

それからは、長期に渡る入院、厳しい塩分制限とトイレ以外は動いてはいけないという、昨日と全く違う生活の中、「頑張って治療を続ければ必ず治る。」と信じていた事を思い出します。その当時知らされていたかもしれませんが、私の腎臓はすでに慢性腎炎になっていて、完治は難しかった事、これからの治療は、ただ今の状態から悪くならないようにするだけで、そんな苦しい病気に自分がかかってしまったと自覚するのには、何年も先の事になります。

しかし、大人になってからは、目の上のたんこぶであった腎臓病も落ち着いて、普通の生活を送れるようになっていまし

た。そんな時に知り合ったのは、夫の荒木竜二でした。私が中学生の頃から、腎臓病と闘っている事を知っても、彼は気にせず、家族の反対も説得してくれたのです。

そして結婚、諦めていた妊娠と、私の人生の中で一番嬉しく輝きの日々でした。しかし、出産してから少しずつ身体が重くだるくなり、幼いわが子や夫に迷惑をかけ、入院を繰り返す日々が続くようになり、家事や子供の授業参観に行くことすら出来なくなっていました。特に貧血がひどく、わずか30分ですら立っていることが難しくなりました。ついに33歳でとうとう透析導入になりました。

「荒木さん、とりあえず腹膜透析をしましょう。」主治医から言われても、ただ号泣のみでした。まるで人生のすべてが終わったと言われたように聞こえたのです。「このまま生きていても辛い事ばかりだ。死にたい。」とも考えました。そんな私を救ってくれたのはやはり家族です。特に姉はずっと付き添ってくれ、折れそうな心を支えてくれました。「今、出来る最善の事をしよう。」と、そう言い続けてくれたのです。姉の言葉は真実でした。この言葉は、私の人生で治療に迷った時、

苦しくてどうしようもない時、私を救ってくれました。

そして腹膜透析から5年後、とうとう血液透析を宣告されたのです。その時、姉から生体腎移植の申し出があり、私はその話を聞いて

「嬉しい。これから、元気で暮らせるんだ。」と思う反面、このまま姉の申し出を受け入れていいのだろうか・・・と、悩みました。なぜなら、姉の健康な身体にメスを入れ、手術という命に係わる負担を掛ける事、姉の腎臓の片方を採ってしまったら、姉はこれから元気に暮せるのだろうか・・・とても不安になりました。しかし、主治医の説明を受け、移植の勉強をするうちにひとつずつ解決し、最後は姉が言い続けてくれた、「今、出来る最善の事をしよう。」と言う言葉で、勇気を出して移植手術を受ける決心をしました。

生体腎移植は、2004年6月、国立病院岡山医療センターで行いました。

現在、おかげさまで姉から移植した腎臓はとても順調です。今のところ、感染症や拒絶反応の兆候もありません。貧血も治り、血圧も劇的に変化し、たくさん飲んでいただる薬はゼロになりました。体も軽くなり、念願だった子供の学校



## 特集 移植を考える！



イベント会場で啓発活動

透析（血液透  
析・在宅血液透  
析・CAPD）が良いか、  
移植が良いかは、  
はっきりと示すこ  
とは出来ないと思  
います。しかし、  
私のように移植し

行事も参加出来るようになりました。そして、初めて学校の役員をしたり、お母様達とランチをしたり、子供の部活の応援は、今まで出来なかった分を取り戻すぐらいの勢いで毎回駆けつけました。

そんな私の変化を、一番驚いたのは、近くで私を見ていた主人です。主人は、今、市議会議員をしています。もっと、臓器移植のことを、社会に知らせる活動を積極的に進めていこうと頑張っています。そして、透析患者が過剰にやすすぐ暮らせるために、福祉を充実させる事が必要だと考えています。

そして、私の受けた生体移植手術は、ドナーもレシピエントも移植した後も、二人共に元気で暮らして行かなければならないという、使命があると考えています。姉と私が元気に暮らしていく姿が、後に続く人たちに、安心して移植を受けられる道標になればよいと思っています。

たことで、健康の素晴らしさを実感できたという事も知って欲しいと願っています。仮に移植を希望していても、日本ではまだまだ、臓器の提供の数が少なく、移植手術は難しいかもしれませぬ。移植を増やすには、世間に広く、理解を得られるよう啓発活動を続けていく事が、何より大切だと思っています。

腎臓病に係る全ての人が、力を合わせ、手を携えて努力していけば腎臓病は怖い病ではなくなるでしょう。早くそのような日が来るよう願っています。

最後に、手術して下さった国立医療センター・田中信一郎先生や、今まで私を支えてくださった皆様の為にも感謝を忘れず、これからも元気に生きていくことが、恩返しだと思っています。ありがとうございました。



幸せな生活を送ることが出来るのも、家族のおかげと話される、荒木さんご夫妻。うらやましいほど、仲の良いご夫婦です。